



## 彦根屏風と松浦屏風

坂東 久平

2019年12月15日(日)に大和文華館で開催された特別展「彦根屏風と松浦屏風」鑑賞した。

友人のAさんから招待券を頂いたのと、NHKのニュースを見て関心があったので、家内と二人で行った。彦根屏風と松浦屏風の同時展示は、1984年の特別展以来35年ぶりのことだそうです。当日は彦根城博物館の高木氏の講演もあったので、大変勉強になった。

国宝・彦根屏風 (彦根城博物館蔵)



国宝・松浦屏風 (大和文華館蔵)



二つの屏風は、何れも近世の風俗画の代表作で、彦根や松浦の景色を描いたものではない。

長い戦乱の時代が終わり近世初期では、現世を楽しむ風潮が出て、絵画も主流の枯山水や宗教画(来世を描いた)から、現世を楽しむ様子を描いた遊楽図に変化した。

寛永年間(1624~1644)頃には、遊楽図が熟成し、さらに金地の画面に人物をクローズアップした作品が現れ、二つの屏風はその代表作である。

彦根屏風の作者は不明であるが、狩野派の実力ある絵師に依るものと推定されている。計算された構図、繊細な表現(髪の毛を細かく描いている)、高度な技術(立体感を出すために絞りの柄に胡粉の盛り付けをしたり、染め斑を細かく描いたり、刀の鐔の金属光沢を出したりしている)など、随所に精緻な工夫がされている。

教養のある人ならわかる仕掛けもあり、中国の琴棋書画に見立てて、琴→三味線、将棋→双六、書→艶文、画→画中画の屏風の山水画のように対比させている。

彦根藩十二代・井伊直晃(なおあき)が購入したもので、千両近い大金をはたいたとの文書が残されている。直晃は桜田門外の変で有名な十三代直弼の養父で、19歳から57歳まで藩主を務め、42歳から6年間大老にも就いている。

彼は、真面目で大変趣味の多い方だったようで、刀、雅楽器(300)、更紗(450枚)、古文書、茶器及び茶書などで、有名なコレクターでした。

松浦屏風は、平戸藩主松浦家に伝来したことから「松浦屏風」の名で親しまれている。この作品が大和文華館の所有となったのは、開館準備期の1952年で、1954年に国宝に指定された。

制作時期について諸説あり、①寛文年間説では、松浦静山の注文(1787年)で慶長年間頃の服飾を追憶して描かせたとする。②寛文年間以降説、③元禄年間光琳製作説、④慶長年間説などがある。

六曲一双屏風で、各双とも156cm x 362cmの大きなものである。

遊女の着物や髪型、ロザリオやカルタなどの南蛮趣味の伺えるものが多く含まれている。スケールの大きな華やかさと平板な硬さが入り交じった表現に特徴がある。

\*各屏風を見たい方

彦根屏風：彦根城博物館で年に1度

(4月~5月の1か月間) 展示

松浦屏風：大和文華館で年間1度くらい

(次は2020年4月頃の予定)

(参考文献)

特別展「国宝彦根屏風と国宝松浦屏風」解説書  
彦根城博物館 学芸史料課主幹 高木文恵氏講演